

■**中林梧竹** 書家。〃明治の三筆〃の一人。六朝の書法を探究、造型的な独特の書風を確立して、大きな影響を及ぼし、伝説化。

なかばやしごちく
日本外史・・・1827＝

肥前国小城で、代々鍋島藩の支藩小城藩の中級藩士中林経緯の長男に生まれる。名を隆経、通称彦四郎、硯石を磨りはがして使えなくしてしまったという噂や、神社の額の文字を書いて藩主から褒められ、学費として米百俵を賜ったように、**幼少時から、藩の老儒水町空斎について書を学んで神童ぶりを発揮**、

・・・・・・・1836＝**9歳**：

大塩平八郎乱1837＝10歳：大塩平八郎の乱の起こる、幕府の衰退期に育ち、

蛸社の獄・・・1839＝12歳：父が死去して、家督を継ぐ。日本一の偉い者になるか、日本一の風気者になるかという佐賀人の生き方の後者にうってつけの、**書道へ飽くなき情熱を抱くようになり、**

勸進帳初演・・・1840＝13歳：**初めて江戸に上り、この年死去する幕府の右筆で勝海舟の外祖父男谷燕斎門下から後家流を習って、書道修業が本格化するも、すぐに帰郷するが、生涯にわたって、気の向くまま旅に出、各地を遊歴することの嚆矢になり、その多見・多聞・多感が書作の源泉になって行く。**

天保改革始・・・1841＝14歳：

阿部正弘首座1845＝**18歳**：藩校(興譲館)に入学、儒学と藩務を学ぶかたわら、書を研鑽、**‘家事取締り不行き届き’による謹慎処分があるも、藩命により江戸に留学、幕末三筆の一人市河米庵、その高弟山内香雪、虞世南風の楷書で一世を風靡した小島成斎、最初の師男谷燕斎の一番弟子川上花亭といった一流の書家師事して、書道を学ぶ。**

国定忠治磔・・・1850＝23歳：

ペリー来航・・・1853＝26歳：この間2度の参勤交代の扈從を別にすれば、

開国開港・・・1854＝**27歳**：10年ぶりに帰郷し、武者大将支配組となり、留学の成果ともいえる扁額「須賀」を揮毫。本藩に鍋島直正という名君のもと、逸早く西洋文明を取り入れる本藩の影響を受けながら、堅実有能な藩士として、

安政大地震・・・1855＝28歳：**藩重役園田氏の墓碑銘は力作で、のちの特有なリズムカルな構成法の萌芽も見られる。**

松下村塾・・・1856＝29歳：

蕃書調所・・・1857＝30歳：旧記方、

五ヶ国条約・・・1858＝31歳：江戸留学時の師市河米庵が死去、

安政の大獄・・・1859＝32歳：江戸留学時の師で、養子に迎えたいとまで言われた山内香雪の重病の報に、上府するも臨終間に合わず、

桜田門外変・・・1860＝33歳：長男経雅が誕生。江戸上屋敷勤務を命じられ東上、

生麦事件・・・1862＝35歳：江戸留学時の師小島成斎が死去。帰藩、

8月18日政変1863＝**36歳**：のちに書道交流を結ぶ広東出身の清国商人林雲達が来日、

禁門の変・・・1864＝37歳：江戸出府時に仕えた直虎が9つで藩主を継ぎ、御側目付、武者大将支配蘭筒頭になる、

薩摩藩士密航1865＝38歳：御側頭、奥御懸硯方、

大政奉還・・・1867＝40歳：学問の師草場佩川が死去。癪症になって下女に切りつける事件を起こした妻と離縁、以後、一人息子経雅はいたものの、やもめ暮らし。この頃から、**清国商人林雲達との交流が始まる。**

明治維新・・・1868＝41歳：**維新を現出した薩長土肥の一角を占める佐賀藩に属しながら立ち回ることをせず、時代に逆行する方向に歩み始め、書道に専念する一方、副島種臣ら一流の人傑との交流する“ひとかど”の人物にもなって行く。**

廃藩置県・・・1871＝44歳：

学問のすすめ1872＝**45歳**：再び上京し、旧主への忠節と心情を吐露した「妄言赤心書」を呈上。売り込みを図るも失敗すると、**師市河米庵が長崎で清人胡兆新に、山内香雪が江芸閣に学んだことに倣うように、一気に本場に乗り込むべく、**

明治6年政変1873＝46歳：**外務卿副島種臣が清国に派遣され日清修好条約を批准するのに関係してか、長崎に出て、清国商人林雲達と頻繁に交流して中国の書について尋ね、それまでの勉強ぶりを示した「梧竹斎いろは手本」の評を求めると、“空海に継ぐ者”と褒められ、真跡「幻中真幻」を遺す間、征韓論で政界が対立、**

佐賀の乱・・・1874＝47歳：**初代「三名家書帖」を著し、林の序文で高く評価される。敗れた下野した征韓派のうち、江藤新平を押し立てた旧佐賀藩士による乱が起こるも直ちに鎮圧されるが、その同調者と思なされ、閉門塾居処分、**

三つの内乱・・・1876＝49歳：

西南戦争・・・1877＝50歳：母が死去。西南戦争になって中止され失職、長崎県庁学務係雇員となる。のちに、明治の三筆と謳われる日下部鳴鶴と巖谷一六は、ともに近江国出身の新進官僚として、太政官大書記官という別世界。駐日清国初代公使何如璋が来日赴任、以後、公使館員と東京の上流墨客の交流が活発に行われ、

大久保暗殺・・・1878＝51歳：そのうち、**余元眉が長崎総領事館を開設して正理事に着任したことを知るや、長崎県庁を依頼退職して、**

・・・・・・・1880＝53歳：

明治14年政変1881＝**54歳**：公使何如璋の招きで、**膨大な資料を携えて来日した楊守敬が、日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯の三人に六朝書道を伝授し、まさに、近代日本の書道開拓が始まるのである。**

新体詩抄・・・1882＝55歳：雪柯は残念ながら死去。**最初の成果書「漢詩」、余から‘日本の字風は梧竹先生をもって開山の祖となす’という賛辞。駐日清国公使の交替で館員も総入れ替えになるが、なぜか、余元眉と楊守敬のみ残留、**

秩父事件・・・1884＝57歳：**●蒐集した170余を携えて、全身清人のいでたちをして帰国、副島らの斡旋で、東京銀座の宮内省御用達の婦人服店{伊勢幸}に居を構え、直後に四曲一双の漢詩屏風を揮毫し、旧藩友人の墓柱石刻のため、峻拔雄偉な書を遺す。女主人青木竹子に身の廻りの世話をして貰い{伊勢幸}は第二の我が家になるが、青木やその姪の話では、茶目っ気のある好々爺だったという。再会を喜んだ余元眉も、聖福寺に梧竹を賛する漢詩を遺して、ついに、清に帰国、同年日本を去った楊守敬もまた潘存の弟子であったことが明かになるが、書壇はなお、幕末以来の老大家ら旧派は健在、対立する六朝派は鳴鶴、一六ら官僚出身者でない貴紳頭官の席に出入りできないなか、古くから親交し、この年、伯爵になった副島種臣が最大にして最良の支援者になるが、副島は、すでに蒼海と号する書家としても高く評価されていて、まさに“龍虎”の間柄になる。**

内閣発足・・・1885＝58歳：

帝国大学始・・・1886＝59歳：栃木市に建立された「藤川君之碑銘」を揮毫したのを皮切りに、**以後10年、連年のように、顕彰碑や頌徳碑を揮毫する間、鳴鶴、一六とも交流するも、彼らからの認識にはズレがあった。**

帝国憲法発布1889＝62歳：**前年に死去した山岡鉄舟を顕彰すべく、東京谷中建てられた勝海舟の文による碑の裏面に揮毫、本格的な篆隸書体による碑文の先駆で、東京で書名の上がる契機になる。**

帝国議会始・・・1890＝**63歳**：

足尾鉾毒始・・・1891＝64歳：

日清戦争始・・・1894＝67歳：

子規句歌革新1898＝71歳：

Bushidou・・・1899＝**72歳**：

この間、同郷の後輩からの求めに応じて書いた扁額「梧竹堂処世訓」は、旧佐賀藩士族に与えた十数ヶ条の戒語であるが、人生の酔いも甘いも知りぬいた人物のみ語れる、簡にして要を得たものになっている。

教科書疑獄・・・1902＝75歳：この年{六書協会}を設立した沙鷗のように、**‘ある水準以上の技量に達した’書家にアドバイスを与えるが、自らの流儀や書法を押し付けることが無く、弟子もいなかったが、自ら今後百年も立ったら評価されるのではないか’**と言ったように、近年、梧竹堂書法の見直し・復興が著しい。

日露戦争始・・・1904＝77歳：

日露戦争終・・・1905＝78歳：

アヲキ創刊・・・1908＝**81歳**：

大正政変・・・1913＝86歳：

郷里の三日月村に観音堂を建立、先師として、草場佩川、余元眉と並んで山内香雪を祀っている。

80代半ばより、自らの書の歩みの集大成すべく、執筆を始めるが、

未完のまま、没した。

「書聖梧竹と書の鑑賞」の著者海老塚四郎兵衛と、宮内省の書家梅園方竹が、梧竹の遺した書論を編纂し、1931年に、書の本質をつく多くのことが語られる「梧竹堂書話」を出版した。明治の三筆は、清国の書家に直接師事したということで共通しているが、現代の漢字書道の多くは、明治の三筆の一人日下部鳴鶴と三筆を継いだとされる比田井天来の門流につながっているため、梧竹への評価はいまいになっている。

酒井明「中林梧竹の世界：梧竹堂書法への道 〈明治の三筆〉をめぐる日清書道交流秘話」、